



POINT 1

思・判・表

教材のつながりを意識したパフォーマンス課題の設定

複数の教材を組み合わせた単元を構成し、パフォーマンス課題を設定することで、子どもが自然と単元全体を見通して学習に取り組み、「思考力、判断力、表現力等」を育むことができる。

国語科では1つの教材を1つの単元として授業を行うことが多く、教材と単元の線引きが曖昧になることが多いように感じる。「読むこと」の授業が1つの教材で完結したり、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の課題設定が、その教材のためだけに行われたりすることがあるのではないだろうか。

「思考力、判断力、表現力等」を高めるためには、教材を個別に扱うのではなく、単元ごとのまとまりを見通して学習することが重要であると考え。また、単元のゴールとしてパフォーマンス課題を設定することで、学習に対する必要感やその教材で学んだことを別の場面で活用する力につながっていくだろう。

「読むこと」の「タオル」という教材にパフォーマンス課題を設定する際、「話すこと・聞くこと」の「説得力のある提案をする」という教材を組み合わせることで単元を設定した。

時数	学習内容	教材	課題
1	パフォーマンス課題を確認し、「タオル」の本文を読む。	タオル	象徴表現について考え、提案文書を作成する。
2	「タオル」の登場人物、時間、場所の描写から内容を理解する。		
3	「タオル」に描かれた象徴表現について考え、交流する。		
4	「タオル」の象徴表現を提案文書にまとめるため、構成メモをまとめる。	説得力のある提案をする	提案文書を作成する。
5	象徴表現を他者に伝えるため提案文書をWordで作成する。		
6	作成した提案文書をもとに発表、交流を行い相互評価を行う。		

【端末に集積したパフォーマンス課題】

1時間目に単元全体に関わるパフォーマンス課題を確認することで、教材や領域をまたいでいても、子どもは見通しをもって学習に取り組むことができる。また、子ども自身が見通しをもって学習に取り組むことができる。また、子ども自身が見通しをもって学習に取り組むことができる。

むことができる。また、子ども自身が見通しをもって学習に取り組むことができる。また、子ども自身が見通しをもって学習に取り組むことができる。

ほかにも以下のような実践を行った。

- ・「紙の建築」で学習した文章構成を意識し、「根拠をもとに意見文を書く」につなげた単元
※「読むこと」と「書くこと」の教材の組合せ
- ・「敬語」で学習した言葉遣いを、「構成を明確にして手紙を書く」で実践することを意識した単元
※「言葉遣い」と「書くこと」の教材の組合せ

このように、教科書に掲載されている様々な教材を組み合わせることでパフォーマンス課題を設定することで、子ども自身が単元の見通しをもてる授業づくりが可能になると考える。

パフォーマンス課題は、タブレット端末を活用してWordやExcel、PowerPointなどのアプリで取り組むと、データの集積が容易になり、子どもが単元や教材で学んだ内容を振り返りやすくなるだろう。

名前	更新日時	更新者
01Allは哲学できるか・具体例をもとに説明...	2分前	神津 豊
02async同期しないこと・問いかける言葉	約1分前	神津 豊
03孫への思い・和歌の調べ	約1分前	神津 豊
04風景と心情	約1分前	神津 豊
05俳句の味わい・自己PR文を書く	約1分前	神津 豊
06故郷・表現の工夫を評価してスピーチを...	数秒前	神津 豊

【タブレット端末に集積したパフォーマンス課題】

このような単元構成や課題設定を行うことで、子どもは自然と見通しをもって学習に取り組むことができ、「思考力・判断力・表現力等」を育むことができる。また、子ども自身が見通しをもって学習に取り組むことができる。また、子ども自身が見通しをもって学習に取り組むことができる。

構成の工夫

士幌町立士幌町中央中学校 教諭 祢津 豊



POINT 2

態度

指導と評価を一体化するための「振り返り」

単元ごとの振り返りや、1単位時間ごとの振り返りを使い分けることで、次の学習につなげたり「主体的に学習に取り組む態度」の評価に活用したりすることができる。

「主体的に学習に取り組む態度」を見取るためには、子どもの振り返りを効果的に活用することが重要だと考える。見通しをもって学習に取り組んでいたか、自分自身にどのような力が身に付いたのかなどの観点を提示し、それらを子どもが自分の言葉でまとめる。単に「分かった・分からなかった」の振り返りを行うよりも、子ども自身が学びを客観的に認識することができ、教師も「主体的に学習に取り組む態度」の評価に生かすことができるだろう。

効果的な振り返りの活用を行うために、子どもが単元終了後に記入する「振り返りA」と、1単位時間ごとに授業の内容を要約して記入する「振り返りB」の2つを使い分けて実践を行った。

記述を行う。例えば、6単位時間で行った単元であれば、その中の特定の時間を取り上げるのではなく、単元全体を通した振り返りを記入する。教師が評価をする際は、単元全体を通した学びの視点が十分に記載されているかを見取り、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に活用する。

4/24	7月1日のCDを聞き、3/24から7/27までの期間に答えた。
7/27	7月1日のCDを聞き、3/24から7/27までの期間に答えた。
4/28	7月1日のCDを聞き、3/24から7/27までの期間に答えた。
7/1	7月1日のCDを聞き、3/24から7/27までの期間に答えた。
5/9	7月1日のCDを聞き、3/24から7/27までの期間に答えた。

【1単位時間ごとに記入する「振り返りB」の例】

単元名	〇〇の活動を通して、△△な力が身についた
虹の足	- 虹の足を読む活動を通して、表現技法や擬人法について理解することができた。 - 詩の創作を通して、どうして擬人法を取り入れるかや何を伝えるかを考える力が身についた。 - 他の人の詩を読み、新たな見方や考え方を保つことができた。
月オル 読得力のある 提案をする	- 月オルを読み、教科書の象徴表現をしっかりと見つけることができた。 - 時間の描写や場所の描写も本文から探し出せた。 - 象徴表現を提案文書にする、発表する活動で色々な型にふれたり、根拠や読得力のある提案をすることができた。

【単元終了後に記入する「振り返りA」の例】

「振り返りA」では、「どの教材を組み合わせで単元としたか」「どのような活動（パフォーマンス課題）を行ったか」「どのような力が身に付いたか」などの視点を示し、子どもが自由

「振り返りB」では、毎時間の学習課題や教師・友達の印象的な発言、学習内容などを子どもがまとめていく。その積み重ねが、「振り返りA」を記入する際のヒントとなったり、授業の最初に子ども同士で行う既習事項の想起に活用したりすることができる。

このように、役割の異なる振り返りを場面に応じて効果的に使い分けることで、学習者のメタ認知能力の醸成を促すだけではなく、授業における「主体的に学習に取り組む態度」の変容も見取ることができるだろう。これらの取組が、指導と評価を一体化するための一助になると考える。